

## 東北地域における知的障害養護学校での農園芸作業学習の事例的検討

名古屋恒彦<sup>\*</sup>・吉岡佐和子<sup>\*\*</sup>・最上一郎<sup>\*\*</sup>

(2004年2月5日受理)

Tsunehiko NAGOYA Sawako YOSHIOKA Ichiro MOGAMI

A Case Study of Learning to Work on a Farm in a School for Children  
with Intellectual Disabilities in Tohoku District

### 1 問題と目的

知的障害教育において、作業学習は、「領域・教科を合わせた指導」の1形態として、主に中学部・中学校・高等部における有効な教育方法とされている。

作業学習では、「作業活動を学習活動の中心にすえ、生徒の働く力ないしは生活する力を高め、学校卒業後の社会生活につなげる」ことが意図される<sup>1)</sup>。そこでは、働く生活における社会自立が目標とされていると考えられる。作業学習は、年間継続的に生徒が作業活動に携わることが多く、継続的な働く活動を通して、社会自立に必要な働く力の育成が図られる<sup>2)3)</sup>。

作業学習の作業種目は多様であるが、その中でも農園芸作業は、その労働性の高さから、作業学習の内容として位置づけられることが多いものである<sup>4)</sup>。

しかし、冬期に積雪があり、屋外作業に大きな制限を受ける東北地域では、年間を通じて継続的に農園芸作業を実施することに困難が大きいという課題がある。この課題を克服し、年間を通じた農園芸作業を実施することを目指した実践研究もなされている<sup>5)</sup>。

冬期の積雪を伴う東北地方では、農園芸作業は、作業活動自体には作業学習として求められる高い労働性を有しているながら、積雪により、年間を通じての作業の継続性に困難があるという課題を有していると考えられる。

一方で、作業種目として「地域性に立脚したものであること」が言及されている<sup>6)</sup>。この点については、「地域との産業などとの連携をはかることがたいせつであり」との指摘もある<sup>7)</sup>。地域性に立脚した作業種目は、材料の入手や流通経路の確保などの実際上の利点と共に、生徒の地域生活に関連の深い作業活動を展開できるという側面も有する。

その点では、農業を有力な産業とする東北地域において、農園芸作業が、作業学習の作業種目として、軽視できないものであることが指摘できる。

しかし、農園芸作業と地域性の関係では、次のような指摘もなされる。

農耕をとりあげた場合、土地の広さ、気温、地質、周囲の状況などにより栽培する作物や時期

\* 岩手大学教育学部

\*\* 岩手大学教育学部附属養護学校

が異なることはいうまでもないことである。A校で成功しているからといって、同じ作物を同じ方法でB校でとり入れても成功するとは限らないのである<sup>8)</sup>。

東北地域における冬期の農園芸作業の継続性にかかわる課題は、上記引用の指摘する地域性の課題に位置づくものであり、地域ごと、学校ごとの実践研究の蓄積による解決が図られるべきものと言える。

そこで本研究では、岩手大学教育学部附属養護学校中学部において今年度導入された農園芸作業学習を事例的に検討し、積雪期のある東北地域において年間を通じて継続的な農園芸作業学習が展開できる方法に関する示唆を得ることを目的とする。

## 2 方法

### (1) 事例授業

岩手大学教育学部附属養護学校中学部で2003年度より導入された農園芸作業学習(以下、「園芸班」)における作業学習授業を事例授業とする。

園芸班の概要は、以下である。

- ・生徒数：4人(うち1年生2人、2年生1人、3年生1人。男子2人、女子2人)。
- ・教員数：2人(吉岡、最上)。
- ・耕地面積：約900m<sup>2</sup>。
- ・年間の授業期間：4月～11月(ただし、生活単元学習を実施する場合は休止)。
- ・日課上の主な授業時間：週5日(毎日10時30分～12時10分)。
- ・平成15年度の主な栽培作物：花類、葉菜、豆類、根菜。

### (2) 期間

- ・第Ⅰ期：2003年9月末～11月9日。
- ・第Ⅱ期：2003年11月10日～11月20日。

### (3) 期間ごとの方法

第Ⅰ期では、園芸班で、第Ⅱ期に実施する授業の計画を立案する。今年度すでに実施した園芸班作業の成果を検討すると共に、農業専門家より指導助言を受けながら、積雪期前に適切な授業計画を立案する。

第Ⅱ期では、第Ⅰ期に立案した計画に基づき、次年度の作業につながる活動を授業として実施する。この期は、今年度の園芸班作業年間計画の中で最終の期であると共に、積雪直前の期でもあり、現在の年間計画上、本研究課題にかかわる授業実施時期として最適と判断した。この期に実施する授業における生徒一人ひとりが取り組む活動の推移と教師の支援的対応を継続的に記録し、授業展開としての適切性を検討する。第Ⅱ期の授業にあたっては、以下の2点に即して授業検討を行う。

①作業学習の教育目標を授業に即してとらえる視点としての生徒主体の活動<sup>9)</sup>の最適化の検討。ここでは、授業者2人による事例対象生徒(各1人、計2人)の日々の活動記録をとる。

②積雪期前の農園芸作業としての活動の適切性の検討。ここでは、「領域・教科を合わせた指導」の授業検討視点として先行研究に指摘されるもの<sup>10)</sup>を参考に、「活動の選択について」「活動計画について」「場の設定・道具等の工夫について」「授業での教師の配置や声かけ・手助けのあり方について」の4視点から授業における手立てを検討し、課題を示す。

### 3 結果

#### (1) 第Ⅰ期の検討～今年度すでに実施した授業成果から～

今年度すでに実施した園芸班作業の成果を筆者（3人）で検討した。その結果、本研究第Ⅱ期に行う授業にかかわる情報として、以下を確認した。

①現在使用している耕作地については、土壌の状態が十分でなく、いずれかの時期に全面的な土作りを行う必要がある。

②今年度すでに実施した授業の中で、年度当初に実施した校地内花壇への花の植え付け作業は、生徒に取り組みやすく、活動量も十分ある活動であった。

以上2点から、第Ⅱ期に行う作業として、「土作り」「球根の植え付け」を構想した。

「土作り」に関しては、園芸班作業が今年度開始であり、十分に土作りを行っておく必要があることは、作業活動として必然性があると考えた。また、積雪期を迎える屋外耕作地では次年度に向けた作付けが困難なことを考慮すると、年度最終期に今年度使用済みの土に手入れをし、次年度に向けた作業準備を行う必要性からも望ましい活動と考えた。

「球根の植え付け」については、次年度当初に再度花壇への花の植え付け作業をすることを考えると、今年度最終期の第Ⅱ期には、屋内において花の球根を植え付けておけば、次年度当初には、園芸班が栽培した花を花壇に植えることができる。球根の植え付けは、ビニールハウス内で行うことになるが、積雪期に屋外の耕作地が使用できないことを考えると、冬期の作業活動としても適切であると考えた。

#### (2) 第Ⅰ期の検討～農業専門家からの指導助言から～

これまでの園芸班作業の成果検討を踏まえ、専門家として岩手大学教育学部金澤俊成助教授（農学）の指導助言をいただいた。

「土作り」については、金澤助教授に実地に園芸班耕作地を見ていただき、土作りの時期、手順、道具等について指導をいただいた。次年度のための土作りを積雪前のこの時期に行うことについては、堆肥が効果をあげる上で一定期間が必要なことから、支障はないとのことであった。

「球根の植え付け」については、植え付け作業だけでなく、混合土作りも生徒の活動として取り入れたい旨、授業者より照会したところ、混合土作りに関する手順、道具等についても指導をいただいた。

#### (3) 第Ⅰ期の検討～第Ⅱ期の授業計画の決定～

以上の検討から、第Ⅱ期の授業計画として、第Ⅱ期前半には、「土作り」を、後半には、「球根の植え付け」を実施することに決定した。

「土作り」は、耕耘、堆肥入れ、石灰散布を、順を追って全員で取り組む計画とした。耕耘は、耕耘機の使用が考えられるが、どの生徒も取り組み、しかも十分に耕耘できる方法として、フォークを使っての耕耘を行うこととした。なお、「土作り」については、第Ⅱ期直前の作業で、現在作付けされている葉菜、豆類等の収穫が前提となった。

「球根の植え付け」は、校地内にあるビニールハウスを場として、混合土作り、球根の植え付けを、順を追って全員で取り組む計画とした。

#### (4) 第Ⅱ期の検討～授業計画の修正・実施～

第Ⅰ期に計画した授業計画にしたがって、2003年11月10日からの第Ⅱ期授業を準備したが、当初、

第Ⅱ期前には、収穫可能と思われていた耕作地内に作付け中の作物が、今年度の天候不順の影響で十分に生育せず、収穫時期が第Ⅱ期に大きくずれ込むことが確実となった。

そのため、第Ⅱ期期間中の耕作地での「土作り」が不可能となり、計画を修正し、「球根の植え付け」のみを授業として実施することとし、「球根の植え付け」を中心に授業計画を修正した。

日程は、混合土作りが11月10～17日（授業日5日間）、球根の植え付けが11月18～20日（授業日3日間）であった。

(5) 第Ⅱ期の検討～事例対象生徒の活動記録から～

授業者による事例対象生徒A君、B君の活動記録は、表1、表2のとおりである。

(6) 第Ⅱ期の検討～授業者による授業の反省から～

2人の授業者による授業の反省を、「活動の選択について」「活動計画について」「場の設定・道具等の工夫について」「授業での教師の配置や声かけ・手助けのあり方について」の4視点から記述し、筆者（3人）間で確認した。その内容は、以下である。

#### 【活動の選択について】

- ・混合土作り、球根の植え付け共に生徒にとってわかりやすい活動であったため、すぐに活動内容や手順を理解し、取り組むことができる内容であった。
- ・理解しやすい活動内容であったため、一つ一つの作業の出来栄と、次の活動への取り組みに対しての教師の確認はとりながらも、自分から進んで活動に取り組むことができる内容であった。
- ・球根の植え付けでは、自分なりに作業の進め方を工夫しながら取り組める活動であった。そのため意欲的に取り組める活動であった。
- ・チューリップの球根を植え、来年の春に花を咲かせることを口頭のみで伝えた。生徒たちの意識が高まるようにもう少し視覚的な方法で伝える必要があった。
- ・混合土作りは初めての活動であったが、予想以上に生徒達は集中して取り組んでいた。
- ・植え付け作業は、生徒たちが好んでいる仕事であり、できるだけ多く取り組めるように行いたいと考えた。

#### 【活動計画について】

- ・混合土作りと球根の植え付けとはっきり日程を分けたことで、一日の活動の中で自分なりの見通しをもって作業に取り組むことができたと思う。
- ・混合土づくり作業を一定期間行ってから、植え付けの作業を行った。同じ作業を繰り返し行うことで、生徒達は作業手順を理解したり、見通しをもったりしながら活動することができた。
- ・作業工程を分担しなかったことで、自分なりのペースで取り組むことができていた。
- ・この作業の期間中に、前時2校時の授業が運動でマラソンであったため、週末には3・4校時の作業の時間には、疲れが見えていた生徒もいた。
- ・混合土づくりから植え付けの作業に切り替えるとき、混乱する生徒がいた。一日の活動の中で、混合土づくりから植え付けまでの流れを継続する方法もあった。

#### 【場の設定・道具等の工夫について】

- ・各作業台に生徒2人と教師1人という配置であったため、作業に集中して取り組める状態であった。また、広さ的にも友だちや教師の様子を見ながら取り組むことができる状態でもよかった。
- ・作業台ごとに作業を進めることができるよう、それぞれの作業台に2種類の土を用意した。また、混ぜ合わせた土を2つの作業台の間に置くスペースを作ったことで、より活動工程の見通しがもちやすくなったと思う。

- ・土をはかり入れる道具として、500mlのペットボトルを、土を入れやすいように斜めに切ってスコップ代わりに用いたことで、土を汲み入れやすかった。ペットボトルには、少し厚くて硬いもの（炭酸飲料用）のものが、より土を汲み入れやすかった。
- ・球根を植える際に球根用の穴をあけるための仕切りを作った。その教具があることで、教師の支援が少なくてもよく、自分から活動に取り組むことができたと思う。
- ・球根用の穴を土にあける道具として、少し大きめの食事で使うスプーンを用いたが、春の作業の際に苗を植えるための道具として使ったこともあり、また穴の大きさにもあっていて生徒が違和感なく穴をあける道具として使っていた。
- ・ハウス内で作業ができ、天候に左右されず取り組める活動であった。
- ・混合土づくりでは、土をまぜる場所、土を集める場所、プランターを置く場所を明確にし、作業の流れを一定にした。生徒たちは混乱することなく、取り組むことができた。
- ・ハウス内で作業を行ったため、作業が進むにつれ、プランターの置き場所に苦労した。ハウスにこだわらず、外に並べる等の工夫をすれば良かった。
- ・球根の植え付けでは、10個の球根をプランターのどの場所に植えるかがわかるように仕切りを作成し、それに合わせて植えるようにした。仕切りがはっきりしない部分があり、教師に確認を求めたり、誤って植え付けたりする生徒がいた。もう少し明確な仕切りが必要であった。
- ・作業の見通しがもてるように、特定の生徒にチェック表を提示した。初めは、あまり意識していない様子だったが、繰り返し使用することで、見通しをもちながら作業に取り組むことができた。

#### 【授業での教師の配置や声かけ・手助けのあり方について】

- ・自分で回数を意識できる生徒たちであったため、土の分量等を回数で示したが、一人で活動に取り組むことができた。
- ・教師の支援としては、作業内容が生徒にとってすぐに覚えて取り組むことができるものであったため、必要最低限の声かけしか行わなかった。そのことで、生徒も作業ペースを自分なりの方法でつかみ、取り組むことができていたと思われる。
- ・具体的支援としては、生徒の様子を見ながらの声かけと、それぞれの作業の初めての時間の具体的示範が主であった。
- ・土をまぜる際、2種類の土をどれくらい入れればよいかわかるように、回数を伝えた。生徒が土をすくう動きに合わせて、「1, 2・・・」と数を数えた。
- ・生徒のその日の様子に応じて、やるべき作業の一部を教師が行ったり、取り組みやすいように、セッティングをした。

## 4 考察

### (1) 第I期について

第I期の授業計画立案では、本事例となった園芸班作業が今年度初めて実施されたこともあり、土作りのように作業班発足に必要な条件整備にかかわる活動も重視して検討した。このような視点で授業計画を立案することは、年間を通して一定の作業種による作業活動を実施する作業班の発足には不可欠であると考えられる。発足時の条件整備如何によって、その後、一定の流れで継続される作業学習の成果に大きな影響が生じるからである。本事例について言えば、作業班発足の早い段階で、すでに実施した園芸班作業の成果に基づき土作りの必要性が認識されたことは、意義あることであった。

一方で、土作りは、単に作業班発足時だけでなく、園芸班作業の年間のサイクルの中で、明確に時期を位置づけ実施していくことが求められる活動でもある。その時期として、堆肥入れ後、一定期間をおくことが望ましいという事情から、積雪前の時期にその活動が位置づけられることが、授業者の検討や専門家からの指導助言の過程で明らかになったことは、積雪期を見通した園芸班作業の年間計画の目安となろう。積雪期の屋外作業の休止を、土作りに必要な休耕期間として積極的な意義に転化できる一つのプランである。

ただし、本事例のように、農園芸作業においては、収穫時期のずれ込みがあり得るのも厳しい現実である。柔軟性があり、かつ必要なことを行える年間計画の立案が求められる。

また、年度当初に成果をあげた花壇への花の植え付けを、園芸班作業に明確に位置づけることと呼応して、年度終了にあたる本事例第Ⅱ期の作業活動を組織する視点も、年間計画立案の方法として、有効なあり方であると考ええる。農園芸作業が、四季の移り変わりに沿って年間の大きなサイクルで展開される性格であることを考えれば、本事例で計画された球根の植え付け作業は、今後一層明確に園芸班作業の年間計画に位置づけられてよい。

植え付けにかかわる作業は、ビニールハウス等の屋内での作業が可能であり、その点でも積雪期に実施可能な作業内容として有効である。

積雪期を踏まえた農園芸作業の年間計画のあり方、とりわけ積雪前の時期における活動計画のあり方として、本事例では、以上の2つのあり方が示された。

いずれも、今後その位置づけを明確にしていくべきものと考えますが、日程計画上、両者を本事例第Ⅱ期の作業活動として位置づけるには、活動量と日程の関係上課題もある。本事例の第Ⅱ期の授業が球根の植え付けのみで成立した事情を考え合わせれば、両者を年間計画上、どのように位置づけていくかが課題となろう。

なお、第Ⅰ期の検討過程では、農業専門家として、岩手大学教育学部金澤俊成助教授の指導助言をいただいた。農園芸作業に限らず、作業学習では、専門性が要求されることが多い。専門家とのかかわりを生徒共々深めていくことができれば作業学習の技術的向上につながる。

## (2) 第Ⅱ期について

前述の通り、第Ⅱ期は、当初の予定を変更し、球根の植え付けのみに取り組んだ。結果、授業の反省にも示されたように、主な活動が「混合土作り」「球根の植え付け」の二つに絞り込まれ、活動の進めやすさにつながった。

計画された活動内容自体もそのために用いられた道具等も、生徒に取り組みやすいものであったことから、主体的に取り組める状況をつくることができた。このことは、事例対象生徒の活動記録からも読みとることができる。

「混合土作り」「球根の植え付け」という二つの活動を、本事例のように時期を分けて行うことと、同一時期に同時に展開する方法があり得、授業者の反省にも両者への言及が見られる。いずれの場合も存分に取り組めるだけの活動量があることを前提に、生徒にとって見通しをもって主体的に取り組めることと実際的な作業活動となることから検討されるものと考えられる。

ビニールハウスを場としたことで、活動が天候の影響を受けなかったことは、本事例の形態による実践研究を継続し、活動の最適化を図る過程で、積雪期にも対応できる作業活動の実施が期待できることを示唆する。授業の反省に述べられた場の整理等の授業の状況づくりと共に、第Ⅰ期の検討で示された屋内作業を年間計画にどのように位置づけていくかも課題となろう。ビニールハウス等での屋内作業の充実が、屋内生産物の拡充に伴い、屋外作業の活動時期や活動量等の検討も促すからである。

### (3) 積雪期の農園芸作業のあり方について

本研究では、積雪期のある東北地域において年間を通じて継続的な農園芸作業学習が展開できる方法に関する示唆を得ることを目的とし、事例的検討を行ってきた。

積雪期のある地域での農園芸作業学習のあり方として、本事例から示唆されることは以下の2点である。

まず第1に、積雪期を年間計画にどう位置づけるかの問題である。積雪期に屋外作業が休止せざるを得ない場合、その休止を単なる中断とせず、本事例で検討された積雪前の土作りのように、耕作地の養生期間とする年間計画のあり方がある。その一方で、屋外作業を休止している期間に実施可能な屋内作業の充実も検討課題となる。本事例では、ビニールハウス等の屋内作業の充実を方向性として示したが、その場合、屋内作業自体の作業内容を年間計画にどのように位置づけ、意味づけていくかも検討されていくことになる。屋内作業を行う場合には、ビニールハウスや作業室の整備も欠かすことができず、全校的なコンセンサスの下に場の確保がなされることも必要となる。

第2に、主に本事例第Ⅱ期において検討した生徒の活動の質の問題である。年間計画上、いかに活動を検討し、積雪時の農園芸作業に年間計画上の整合性をもたせたとしても、その活動に携わる生徒にとって、主体的に取り組める作業活動でなければ、自立の実現を願う作業学習としては成立しない。

活動の選択段階から、場や道具等の検討、教師の直接的対応の手立てのあり方等が検討されていく必要は、農園芸作業といえども、他の作業学習や自立を願う授業同様に、入念になされねばならない。とりわけ、農園芸作業は、他の作業種に比べ、生産サイクルが長く、見通しのもちにくい作業種である。一層の手立ての充実が求められる。

本事例では、生徒が主体的に取り組む作業活動として成立する手立てを四つの視点から検討したが、「球根の植え付け」という1事例が、屋内作業による生徒の農園芸作業の充実に、可能性を示すことができたと考える。

今ひとつの授業計画であった屋外での土作りの検証と合わせ、実践研究の蓄積を、今後とも図っていきながら、積雪期のある東北地域での農園芸作業学習のあり方を実践的に明らかにしていくことが課題となろう。

### 【謝辞】

本研究にあたりまして、岩手大学教育学部金澤俊成助教授には、お忙しい中、お時間をさいいただき、附属養護学校までおいでいただいたの実地指導、また教育学部技術科農場の見学等もさせていただきました。金澤先生の親身なご指導に、筆者一同心よりお礼を申し上げます。

※本研究は、平成15年度大学活性化経費奨励研究によるものです。

- 1) 文部省『作業学習指導の手引』（東洋館出版社、1995）、20-36頁。
- 2) 同上、20-36頁。
- 3) 中坪晃一「生徒が主体的に取り組む作業学習-自分から、自分で、めいっぱい取り組む-」（『発達の遅れと教育』No. 554、2003年）、4-8頁。
- 4) 文部省、前掲書1）、20-36頁。

- 5) 山形県立鶴岡養護学校『つるよりの実践』(山形県立鶴岡養護学校、2003年)、20-21頁。
- 6) 文部省、前掲書1)、20-36頁。
- 7) 大南英明・富岡達夫・松原隆三『作業学習ハンドブック』(福村出版、1987年)、48-49頁。
- 8) 同上、48-49頁。
- 9) 中坪晃一、前掲書3)、4-8頁。
- 10) 小出進監修『生活中心教育の原理』(K & H、2002年)、144-146頁。



表1 A君の活動記録(抜粋)

目標：作業手順を分かり時間いっぱい作業に取り組むことができる。

自分から進んで活動に取り組むことができる。

月/日	主な活動	活動の様子	支援の手立て・反省
11/10 ～ 11/17	<ul style="list-style-type: none"> <li>土をまぜる。(ペットボトルを使い、土5回、パーミキュライト1回をバケツに入れまぜる。まぜたものをシートの上にあける。)</li> <li>プランターに土を入れる。(赤玉土をペットボトルで10回と土をスコップで入れる。)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>最初の何回かは、土の分量や、入れる回数を、教師と確認しながら、一緒に取り組む。</li> <li>徐々に自分の判断で、作業に取り組むようになり、教師には土を入れる回数と「土を混ぜた」という活動の確認(報告)のみとなった。</li> <li>開始の合図がかかる前に、自分から机のところへ行き、活動に取り掛かろうとする様子が見られた。</li> <li>確認(報告)の言葉は必ず出る。</li> <li>作業の流れが分かり、一人で取り組んでいる。</li> <li>友達の様子を見ながら、スコップでプランターに土を入れる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>実際に活動に取り組む中で、土の分量とバケツに入れる回数を確認。</li> <li>目標個数は特に決めなかったが、終わりの合図がかかるまで、活動に取り組んでいた。</li> <li>プランターへ入れる土の量(目安)をはっきり示しておくより一人で取り組んでいたと思われる。</li> </ul>
11/18	<ul style="list-style-type: none"> <li>プランターに球根を植える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>球根についているビニールテープはがしでは、取れないときに、「とってください」と要求する。</li> <li>球根植えは、木杵とスプーンを使い、丁寧に植え付けを行っていた。</li> <li>掘る深さなど少し難しいようで、浅く掘る時もあったが、「もう少し深くだよ」等の声掛けで、深く掘ることができるようになってきた。徐々に声掛けも必要なくなってきた。</li> <li>「次、お願い」の声掛けで新しいプランターに取り組む。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>一緒に作業を確認しながら活動に取り組む。</li> <li>様子を見ながら、徐々に動作や声掛けの支援を減らしていく。</li> <li>今日取り組むプランターの数をもっとしっかり本人に確認しておく必要があった。</li> </ul>
11/19	<ul style="list-style-type: none"> <li>プランターに球根を植える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>作業開始前の道具の準備は、声掛けをしても何を準備すればいいのかわからないようであったが、机上に道具が準備されると(声掛けをしながら一緒に準備する)、スムーズに作業に取り組むことができた。</li> <li>昨日、自分のやっていた方法と同じ方法で、作業をする。(右端上の段から順番に植える)</li> <li>「できました」の教師への確認を求める言葉がプランター完成ごとに出てくる。教師に、「いいよ」といわれると、プランターを置きに行く。</li> <li>時々「次、お願い」の声掛けが必要になったが、自分からプランターを持ってきて、球根植えに取り組むことができていた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>活動を見守りながら、必要と思われる部分についてのみ声掛けをする。(植えつけた後の土を平らにする部分。)</li> </ul>
11/20	<ul style="list-style-type: none"> <li>プランターに球根を植える。</li> <li>球根を植えたプランターを運ぶ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>慣れた手順で活動に取り組む。</li> <li>一斉指示のほかに個別の指示をしたが、なかなか活動が頭に入らないようで、活動に取り組むのに少し時間がかかった。</li> <li>自分がどれくらい運ばばよいか分かってからは、落ち着いて頑張ることができていた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>具体物を指さしての指示。</li> <li>教師も同じ活動に取り組む。</li> <li>全プランター数(70)が分かるように見える位置に置く。</li> </ul>

表2 B君の活動記録(抜粋)

目標：作業手順を理解し、見通しをもって働くことができる。

月/日	主な活動	活動の様子	支援の手立て・反省
11/10	<ul style="list-style-type: none"> <li>土をまぜる。 (ペットボトルを使い、土5回、パーミキュライト1回をバケツに入れまぜる。まぜたものをシートの上にあける。)</li> <li>プランターに土を入れる。 (赤玉土をペットボトルで10回と土をスコップで入れる。)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>モデルにはあまり注目せず。</li> <li>声掛けに応じて、スムーズに行く。</li> <li>3回続けて行方が4回目に入ろうとするところで歩き出すが、名前を呼ばれると戻ってくる。</li> <li>モデルを見ている。</li> <li>1回目はスムーズに行く。</li> <li>2回目に名前を呼ぶと怒るが、作業は行う。</li> <li>3回目も名前を呼ぶと怒り始めるが、終わりを伝えるとスムーズに行く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>実際に行いながら説明。 (ペットボトルを渡す、1~5を数える、指さし)</li> <li>無理に続けず、様子を見ながら声をかける。</li> <li>見通しがはっきりした方がいいのでは。</li> <li>プランター3個を見せ、取り組む量を伝える。</li> <li>これで終わりであることを伝える。</li> </ul>
11/17	<ul style="list-style-type: none"> <li>土をまぜる。 (ペットボトルを使い、土5回、パーミキュライト1回をバケツに入れ、シートの上に土をかける。)</li> <li>プランターに土を入れる。 (赤玉土をペットボトル7回と土をスコップで7回入れる。)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>先週の後半欠席したが、仕事は覚えており、6回は続けて行ったあと一息つく。</li> <li>前半はマグネットをあまり意識していないようだった。</li> <li>土を入れているかごとに土が足されるのを見ると、「まだやるのか?」という様子で声をあげていた。</li> <li>後半、マグネットの数を意識し始め、終わりまでの励みにしているようであった。</li> <li>休憩後の作業は、やはりマグネットの数を意識しながら終わりまで作業を続ける。</li> <li>スコップの扱いはぎこちないが、一人で言うことができる。</li> <li>3個のプランターにスムーズに土を入れることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>仕事量の見通しがもてるようチェック表を準備。 (10回分×2セット)</li> <li>一回シートに土をあけたら教師がマグネットを一つ貼る。</li> <li>本人がマグネットを見たときや注意を向けるように声をかけた後貼る。</li> <li>10回目に自分でマグネットを貼るようにし、休憩を伝える。</li> <li>スコップの持ち方を手を添えて伝える。</li> <li>土を入れる回数を「7回」と決め、「いち、に」と数える。</li> </ul>
11/18	<ul style="list-style-type: none"> <li>プランターに球根を植える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>教師のモデルを見ている。</li> <li>教師が作業の準備をしているとき怒り始める。(作業内容が異なるためか?)</li> <li>前半は怒りながらも穴を掘って植える作業を行う。</li> <li>球根の上下の判断は難しいが、掘って植えることはスムーズに行く。</li> <li>教師がプランターを机の上にのせると、自分から近づいてきて作業を始める。</li> <li>作業を行う中で、徐々に落ち着きを取りもどし、10個のプランターに球根を植える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>植え方の手順について実際に植えて伝える。</li> <li>作業量チェック表を提示し、一つ終わるごとにマグネットを貼る。</li> <li>様子を見て、プランターを机にのせたり運んだりする作業は教師が行う。</li> <li>目標の10個を行ったあとは休憩タイムとし、見守る。</li> </ul>
11/19	<ul style="list-style-type: none"> <li>プランターに球根を植える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>前日で作業の流れを理解したためか、落ち着いて作業に取り組む。</li> <li>穴を指定されたところに掘り、球根を入れることはできるが、きちんと植え込むことは難しい。</li> <li>球根を数個植えてはふらつくが、自分で戻ってきて10個植えることができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>小皿に10個球根を入れ、終わりがわかるようにする。</li> </ul>
11/20	<ul style="list-style-type: none"> <li>プランターに球根を植える。</li> <li>球根を植えたプランターを運ぶ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>昨日までと同じ作業のため、落ち着いて取り組む。</li> <li>確認する。</li> <li>周りの友達が運んでいるのを見て一緒に運び始める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>作業量チェック表(3回分)を提示し、一つを貼る。</li> </ul>